

3年生保護者様

平成24年度全国学力・学習状況調査、佐賀県学習状況調査結果の分析について

小城市立芦刈中学校
校長 小森 義美

平成24年度全国学力・学習状況調査は、4月17日(火)に全国の中学3年生に対して行われたものです。教科は国語・数学・理科の3教科で、国語と数学はそれぞれ「基礎的知識を問うA問題」及び「知識を応用する力をみるB問題」のテストが行われました。生活・学習状況等に係るアンケートも同時に行われました。また、佐賀県学習状況調査は、3年生は4月18日(月)に、全国学力・学習状況調査では行われなかった社会・英語の教科について実施されました。本校では、今回の調査結果を基にして成果と課題を分析し、学習内容や指導方法の改善・充実を行い、生徒一人ひとりの学力の向上を図っていきます。なお、生徒一人ひとりの学習の状況につきましては、「学習状況シート」を配布しております。

1. 3年生の傾向と今後の指導について

	傾 向	今後の指導について
国語	全体での正答率は、県平均を上回り、十分達成、おおむね達成の生徒の割合が県基準を上回る成績でした。観点別にみると、「話す・聞く」、「読む」は下回り、「書く」、「言語事項」は県平均を上回っている。また、問題の内容では、問3、問6の正答率が県平均を大きく下回っていたため、「読む」ことを苦手とする生徒が多くいることが分かった。	授業では、どの生徒も真剣に取り組むことができているので、今後も継続させたい。「話す・聞く」「読む」の観点で県平均を下回っているため、スピーチ発表など、生徒が話す機会を増やしていきたい。また「読む」では、たくさんの文章問題に触れさせることで、読むスピードや重要な点に気付くコツがつかめるよう、読む問題を中心に行いたい。
社会	全体での正答率を見ると、県平均とほぼ同じ程度、十分達成・おおむね達成の生徒の人数の割合が県基準を上回る成績であった。 観点別では、「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」とともに、県平均をクリアしている。 しかし領域別に見ると、「近世の日本」「近代の日本」とともに、歴史的な分野は県平均を上回っているのに対して、「資源や産業から見た日本の地域的特色」「様々な面からとらえた日本」といった地理的分野でわずかながら県の値を下回る結果が得られた。	全体として、努力を要する児童生徒の人数の割合は県を下回っている。しかし、正解率10%未満は0であるものの、正答率10~20%の生徒の割合が県の値より多く、社会が苦手と感じている生徒がいるものと考えられる。 学習した内容がしっかりと定着できるよう、これまで以上に、家庭での学習、ノートや書き方の指導や復習テストなどに力を入れていきたい。また授業の中で地図や資料などを使ったり、読み取ったりする作業的な学習や多角的に問題を考えたりする課題を多く取り入れ、苦手克服のために、「暗記」に頼る学習方法を考え直すきっかけにしていきたい。
数学	全体での正答率を見ると、数学Aでは県平均をやや下回っているものの、数学Bでは県平均をやや上回る結果となっている。 数学Aは「表現・処理」と「知識・理解」の2観点しかなく、ともに県平均をやや下回っている。数学Bでは「表現・処理」の観点はAと同じくやや下回っているものの、「知識・理解」の観点ではほぼ同じ程度であり、Aにはなかった「見方や考え方」の観点では、大きく上回る結果となっている。	昨年度の同様の調査では、数学を苦手としている傾向がもっと強かった。落ち着いた授業の雰囲気や、提出物を確実に出してほしいという態度が、力となっていると思われる。 「表現・処理」の領域を苦手としているので、計算問題等の繰り返し学習を、様々な場面で根気強く取り組んでいきたい。夏休みや放課後の学習会の中でも、きめ細やかに指導を続けていきたい。
理科	本校の全体の内容に対する正答率は、県正答率とほぼ同じ程度であった。到達度分布において、要努力の生徒の割合は県平均より低く、十分達成の生徒の人数の割合は、県平均を大きく上回っている。「知識・理解」「思考・表現」「観察・実験の技能」とともに、県平均とほぼ同じ程度であり、全体的にはどの項目も県正答率と有意差は見られない。内容・領域別では、どの領域においても県平均をわずかながら上回っており、標準的な学力が身につけていると考えられる。	全体的にどの単元・領域においても、成果が上がっているが、「観察・実験の技能」領域はもっと伸ばせるように思われる。全体的な傾向として、内容が高度になるにつれて、成績上位の生徒はより意欲的になる反面、これまでの知識・理解が十分でない生徒の意欲は低下している。全体的に、実験・観察は好きな生徒が多いので、興味関心を高める内容を多く取り組み、理科を苦手とする生徒のやる気を引き出していきたい。
英語	全体的に見て、正答率は県平均をやや下回る結果となった。県平均を基準としたときの観点別正答率では、いずれも基準に達していない。また、内容領域別正答率においては、「書くこと」における力が、県平均を下回り、場面に応じて英語で表現することを苦手としている生徒が多いことがわかる。「聞くこと」「読むこと」においては、基準を上回る結果となった。	授業の初めに行っている、英問英答の取り組みの結果が「聞くこと」に関する結果に表れていると考えられる。今後も引き続きコミュニケーション活動として行っていき、応用的な表現にも対応できるように、工夫していきたい。また、自分の伝えたいことを英語で表現したり、英語で書いたりすることを苦手と感じている生徒が多いことから、伝える喜びを感じさせるような表現活動を、積極的に行っていき、加えて、ワークシートやドリルなどの課題を、継続して取り組ませていくことが、今後の課題と言える。

2. 3年生の学習・生活に関する調査結果の特徴的な傾向について (○はよい傾向、△は課題と思われる傾向を表わしています。)

- 2時間以上勉強している生徒が、昨年同時期に比べてかなり増えてきている。
- 「宿題をしている」「復習をしている」と答えた生徒の割合は、県の平均値より高い。
- 朝食を毎日食べているとした生徒が非常に多い。
- 学校の規則を守っていると答えている生徒が、非常に多い。

- △ 復習している生徒は多いが、予習をしている生徒が少ない。